

会話的推意の取り消しに関する誤解

木下 蒼一郎 (Soichiro Kinoshita)

東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻

1. 発表の趣旨

本発表は、仄めかしたメッセージについてのコミットメントを明示的に否認する行為——「言い抜け」——と、会話的推意 (conversational implicature; Grice 1975) を明示的に否定する行為——「取り消し」——とが別のものであると述べる三木 (2022) の議論を、その根拠として三木が挙げている「協調原理からの独立性」「メッセージ持続性」という二つの概念に焦点を当てて批判的に検討する。

2. 会話的推意の取り消しは協調原理に否定的に依存していない場合がある

三木 (2022) の議論は、話し手の意味 (speaker meaning; Grice 1982) は必ず「公共性」を持つとする三木 (2019) 議論を下敷きとしている。話し手 S が発話 x によって p を意味するのは S が然るべき意図を伴って x を発話したときであるとするグライスの意味論に対し、三木 (2019) は S が x によって p を意味するのは x という発話が『S が p を信じている』ということに聞き手 A と共同的にコミットするための S 側の準備の表立った表明」であるとき、そしてそのときのみであるという代案を提出し、意図説の抱える困難を克服することを試みている。この立場を引き継ぐ三木 (2022) にとって、会話的推意の取り消しは下の会話的推意成立要件のうち(3)の否定ではあり得ない。というのも、(3)は意図説と同じく話し手の心理に基づいて推意を決定する条件であるため、発話 x が推意 q に関する共同的コミットメント形成の準備表明となっているか否かをもとより左右しないからだ。

[会話的推意の成立要件]

“p と言う(あるいは言うふりをする)ことで(ときに、なかで)q と推意したひとが、q と会話的に推意したと言われうるのは、(1)そのひとは会話の格率を、あるいはせめて協調原理は遵守しているものと推定され、(2)そのひとの p という発言またはその素振り(あるいはまさにその言い回しにおいてそれがなされていること)をこの推定と両立させるためには、そのひとが q と気づいている、あるいは q と考えている、と仮定する必要があること、そして(3)先の(2)で触れた仮定が必要だと割り出したり、直観的に把握したりといったことが聞き手の能力の範囲内にあると話し手が考えている(しかも、自分がそう考えていると聞き手が考えることを話し手が予想しているはずである)場合である” (Grice, 1975, pp. 30-31, 邦訳 44 頁, 三木 2022 より引用)すると三木 (2022) にとっての会話的推意の明示的取り消しは(1)か(2)を否定することで「その発話 x は推意 q に関する共同的コミットメント形成の準備表明に値しない」ことを示す行為であることになる。ところが三木 (2022) は明示的取り消し全般を(1)の否定、即ち「実は協調原理に従っていなかったという自白」とみなし、そこから「会話的推意の取り消しは協調原理に否定的に依存している」(ibid.) と結論している。これは登

話 x が推意 q に関する共同的コミットメント形成の準備表明とならないのは S が協調的でない場合のみであるという主張に他ならず、(2)の否定にあたるケース(たとえば、q を想定せずとも p だけで十分協調的であることを S が示したり、q とは別のことを推意していることを明示したりする場合)を無視している点で一般化として強すぎる。よって推意取り消し全般が協調原理に否定的に依存しているという主張は誤りである。

3. 取り消された推意であってもメッセージ持続性をもつ場合がある

三木 (2022) の観察によると、取り消された会話的推意に基づいて後の行動を決定することは不合理である(=メッセージ持続性を持たない)が、言い抜けがなされた仄めかしに基づいて後の行動を決定することは不合理ではない(=メッセージ持続性を持つ)。そしてその理由は推意の取り消しは話し手が協調的でないことを前提とするが、仄めかしの言い抜けは話し手が協調的であっても良いからであるとされる(ibid.)。しかし、グライスによる会話的推意の 3 分類のうちグループ(C)：自覚的にあえて会話の格率に違反させてみせているケース (cf. 三木 2021) に属するアイロニーは取り消し可能であるにもかかわらずメッセージ持続性を持つ。

アリス：チャールズが君の商売仇に企業秘密を漏らしたって聞いたんだけど……彼のことどう思ってる？

ビル：[アイロニカルに]そりゃ勿論、いい友達だと思ってるよ。(cf. Grice 1978) この状況でアリスが「本当はそんなこと思ってないよね？」と確認したならば、ビルは「いいや本心だよ」と言っ(白々しくも)アイロニカルな態度を取り消しうる。他方で、「言葉の上では態度を取り消したビルも本心ではチャールズを友達に値しないと思っているのだろう」と考えたアリスが後の行動を推意に基づいて決定したとしても全く不合理ではない。ゆえにグループ C の会話的推意は取り消し可能であるにもかかわらずメッセージ持続性を持つことになり、三木の説に対する反例となる。確かに三木 (2022) は「話し手は協調原理に従った発話をおこないながら、その発話によって言い抜け可能なメッセージを聞き手に理解させようとしていてもよい」(ibid.)ことを認めており、その証拠として「p と言うことで会話の目的に即した q を推意とするついでに会話の目的と無関係な r を言葉の節々に仄めかす」ケースを挙げているが、上の例はそのケースには分類されないだろう。というのも、アリスたちの会話の共通の目的はビルがチャールズをどう思っているのかを確認することであり、ビルの発言は字面のレベルでも推意のレベルでもその目的に即しているからである。従ってビルによるアイロニーの取り消しは「僕は実は協調的に喋ってなんかいなかったんだよ」という自白というよりも「推意なしでも協調的でありうるでしょ」という白々しい指摘として理解すべきだろう。

4. 結論

本発表の議論が正しければ、三木の立場として可能なのは「推意の取り消しが協調原理に否定的に依存しているという主張を諦め、メッセージ持続性のみに依拠して言い抜けと取り消しを区別した上で、アイロニーは推意ではない(それゆえ話し手の意味でもない)と強弁する」か、言い抜け=取り消しを認めた上で「ただし完全に伝達された推意は言い抜け不可能である。なぜなら q に関する共同的コミットメントを形成するための S の側の準備が表明されただけの段階では S-A 間での共同的コミットメントはまだ形成されていないからだ」と但し書きを添えるかのいずれかであるように思われる。

参考文献

- Grice, Paul (1975) “Logic and Conversation,” in P. Cole & J. L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*, Academic Press, New York: 41-58. Reprinted in Grice (1989): 22-40.
- Grice, Paul (1978) “Further Notes on Logic and Conversation,” in P. Cole & J. L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 9: Pragmatics*, Academic Press, New York: 41-58. Reprinted in Grice (1989): 41-57.
- Grice, Paul (1982) “Meaning Revisited,” in N. V. Smith (ed.) *Mutual Knowledge*, Academic Press, New York: 223-243. Reprinted in Grice (1989): 283-303.
- Grice, Paul (1989) *Studies in the Way of Words*, Harvard University Press, Cambridge. (清塚邦彦(訳)『論理と会話』(抄訳)勁草書房, 1998)
- 三木那由他 (2019) 『話し手の意味の心理性と公共性』, 勁草書房.
- 三木那由他 (2021) 「会話の格率の三つの破りかた：行為の理論としての会話的推意の理論」, 『科学基礎論研究』 49(1): 33-48.
- 三木那由他 (2022) 「言い抜け可能性と取り消し可能性」, 『大阪大学大学院文学研究科紀要』 62: 1-17.